



Title	三島由紀夫作品の方法 一同時代文脈を視座として一
Author(s)	福田, 涼
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76314
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (福田 涼)

論文題名

三島由紀夫作品の方法
— 同時代文脈を視座として —

論文内容の要旨

本論は三島由紀夫（大14・1・14～昭45・11・25）の小説および戯曲を、作品が発表された当時の文脈に即して考察し、その方法論上の問題性や批評性を見定めることを目的とするものである。全3部7章から成る本論の梗概は、以下の通りである。

第一部「『物語』への憧憬」は、昭和十年代における三島の文学的営為と、それを取り巻く環境との関係性について、主に作品が掲載されたメディアに注目しつつ考察を行うものである。まず第一章では初期短篇の一つである「祈りの日記」（『赤繪』昭18・6）を論証の主たる対象に据えた。王朝女流日記に関する研究は、昭和初年代に池田亀鑑らを中心的な論者として本格化した。本章では、まず女流日記に関する保田與重郎や堀辰雄、清水文雄らの発言などを踏まえつつ、こうした言説状況の内部に「祈りの日記」を位置付けた。またタイトルにも銘打たれた「日記（にき）」という形式に着目して作品を読解することで、本作が「事実」の報告から「物語」へと転化してゆく構造を、王朝女流日記と共有していることを明らかにした。以上を踏まえて最後に、本作と同じく『赤繪』第2号に掲載された東文彦「方舟の日記」に着目し、この西洋風の「日記（にき）体」の小説や東との文学的な交流が、三島に文学的な自己変革の必要性を自覚させたことを論じた。

第二章では、従来「王朝的な美意識」に対する作者の「憧憬」を反映した「物語」と解されてきた「朝倉」（『文藝世紀』昭19・7）を一篇の「小説」として読み直すことを試みた。まず『花ざかりの森』（七文書院、昭19・10）に収められた三島従来の「物語」群が、遙かな過去の美しい「物語」の世界に対する「憧憬」というモチーフを共有することを指摘した。本章は、これを前提としつつ「朝倉」の精読を行った。具体的には「朝倉」における語り和分析を通じて、本作が「夢」や「血統」といった作中人物のロマンティックな思考や、彼らが立ち上げる「物語」をことごとく相対化していることを論じ、そこに本作の「小説」としての条件を見出した。論の後半では、本作が初出誌『文藝世紀』、とりわけ同誌の実質的な主宰者であった中河與一のベストセラー『天の夕顔』（『日本評論』昭13・1）と切り結んでいた関係性を考察することで、三島が本作をもって日本浪漫派からの「訣別」を試みていたことを明らかにした。

第二部「戦後日本社会と『小説』」では、昭和二十年代から三十年代に書かれた三篇の小説を読み解く。戦後復興から高度経済成長へと展開してゆく日本経済の動向にも関心を払いつつ、それぞれの小説の方法論上の問題性と、それらに内包された社会的な批評性を闡明することが、この部の中心的な作業となろう。まず第四章では、三島のいわゆる「古典主義」時代を代表する『潮騒』（新潮社、昭29・6）を、一篇の副主人公たる初江に着目して分析した。かような作業を通じて、明らかとなるのは、ヒロインたる初江の積極性や、彼女が「近代的」かつ「民主的」な恋愛観を保持している事実である。本作の「原初的」で「平板」な「物語」としてのイメージが、かような初江の内面を隠蔽することで形成されていることを、作品の精読を通して明らかにするとともに、「古代さながら」の孤島を舞台とする本作が、戦後復興と「民主化」を果たした当該時期の日本社会において顕在化していた「古代」や「神話」を相対化する視線を具備していたことを論じた。

第四章および第五章では、昭和37年に勃発した所謂「純文学論争」を手掛かりとして、当該時期に発表された二篇の作品から、そこに内包された「小説」や「小説家」の位置、あるいは「小説」のリアリティといった問題に関する洞察を浮き彫りにする。まず第四章では、晩年の作者によって「廃曲」を宣された戯曲「源氏供養」（『文藝』昭37・3）を、当該時期の文学をめぐる状況に着目して分析した。小説家とその愛読者たちの対話を中心に構成された本戯曲の分析を通じて明らかとなるのは、当該時期における文学受容のありかたに対する批判や、大衆消費社会における作家と作品の関係についての批評意識である。本章ではこれに加えて、作品が提示するところの「実在」／「虚構」の二項対立が終幕に及んで無化されるという構造に着目し、本作が当時の文壇を賑わせていた「純文学論争」、とり

わけその中心的な論者であった平野謙の「小説アクチュアリティ説」に対し、アイロニカルな視線を差し向けていたことを論じた。

これに続く第五章では、「源氏供養」（前掲）や異色作『美しい星』（『新潮』昭37・1～11）と併行して書かれたエンターテインメント系の小説『愛の疾走』（『婦人倶楽部』昭37・1～12）について考察した。諏訪湖畔に住む青年男女の恋愛と、それを背後から操らんと試みる凡庸な小説家の駆け引きを主軸に展開される本作では、「世界」という語が殊更に頻用されている。本章ではこの「世界」という語に注目しながら『愛の疾走』を読み解くことで、本作に内包された冷戦期の日本社会に対する批評意識や、複雑な作中世界を構築している『愛の疾走』の小説作法を明らかにした。こうした考察を通じて、冷戦体制が齎した小説の「具体性」（リアリティ）の変容に対応すべく、本作の三島が「世界」の片隅を描きながら、同時に「世界」の広がりをも開示する小説の叙法を獲得したことが明らかとなった。

第三部「文学」と「行動」のあわいでは、三島が最終的な「行動」へと歩みを進めつつあった昭和四十年代に書かれた二篇の「遺作」を分析し、従来看過されがちであった両作の「小説」としての仕掛けを開示することを試みていた。まず第六章では、楯の会における三島の実体験をモデルとして著された『蘭陵王』（『群像』昭44・11）を読み解いている。従来の批評や研究は、『蘭陵王』を作者自身の「思想」ないし「行動」と直結させることで、この作品が備えている小説としての仕掛けや、そこに含まれる洞察を見落としてきた。本章では、作者たる三島と、語り手の「私」とを区別した上で、『蘭陵王』を自律した一篇の小説として精読した。本作は、京都から来たSという学生の「私」に対する離反の言葉で終幕を迎えている。本章では、竜笛を能くするSが雅楽「蘭陵王」の吹奏によって「個」としての倫理を獲得したことを明らかにするとともに、その『蘭陵王』の音楽を詩的言語によって記述する「私」と、「楯の会」会員との差異について考察した。このような読解から明らかになるのは、「集団」の行動へと急旋回を遂げつつあった当該時期の三島にとっての「個」＝「文学」の位相にほかならない。

最後に、第七章では『豊饒の海』四部作について、『春の雪』（『新潮』昭40・9～昭42・1）のヒロイン・綾倉聡子に重点をおいて考察を行った。論の前半部では、従来見過ごされてきた『春の雪』における翻訳文学受容について検討した。具体的には、『春の雪』にはギュスターヴ・フローベール『ボヴァリー夫人』（1856）や、レイモン・ラディゲ『肉体の悪魔』（1923）といった、青少年期の三島が愛読した翻訳文学からの影響が見られるとともに、そうした作品に登場する性的に能動的なヒロインたちのイメージを踏まえて聡子が造型されていることを論じた。また、「生娘」を用いた「復讐」の方法や、その「生娘」が妊娠や墮胎を経て「尼寺」に入るという展開において、『春の雪』がラクロ『危険な関係』（1782）を有力な「典拠」として用いていることを指摘する一方で、『危険な関係』の無垢な少女・セシルとは対蹠的に、自ら積極的に清頭との「罪」へと参画してゆく聡子のありようを浮き彫りにした。以上を踏まえて、本章の後半では、『天人五衰』終結部において本多繁邦が、聡子と清頭の「二人だけ」の「罪」から決定的に疎外されるに至る過程を見定め、「昭和四十五年十一月二十五日」に擱筆された本作において、『トリストタンとイゾルデ』の如き、美しい「悲恋」の「物語」が生き永らえるに至ったことを論じた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (福 田 涼)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 准教授 斎藤 理生 副 査 大阪大学 教授 飯倉 洋一 副 査 大阪大学 教授 滝川 幸司
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 三島由紀夫作品の方法 ―同時代文脈を視座として―

学位申請者 福田 涼

論文審査担当者

主査 大阪大学准教授 斎藤 理生

副査 大阪大学教授 飯倉 洋一

副査 大阪大学教授 滝川 幸司

【論文内容の要旨】

本論文は、三島由紀夫の小説および戯曲の方法を、作品が発表された当時の文脈に即して考察した研究である。三島の文学は今日でも世界中で広く読まれ、研究も盛んである。それらの中で本論は、没後半世紀を経た現在では見えにくくなった初出時の媒体や状況を踏まえて、一つ一つの作品が持つ問題点や批評性を浮き彫りにしていることが特徴である。

全体は三部七章より構成されている。第一部「物語」への「憧憬」では、戦時下における三島の出発期の作品を、主に発表媒体との関係に着目して考察している。

第一章「日記」という形式（副題は省略、以下同じ）では、「祈りの日記」という小説を、王朝女流日記に関する同時代の言説状況を踏まえつつ、「日記」という形式の効果に着目して分析している。また、『伊勢物語』『更級日記』『ルウベンスの偽画』など、複数の先行作品を補助線にして、語り手による「仮構の恋」を明らかにしている。その上で、発表媒体である同人誌「赤繪」が作家にもたらした意義を考察している。

第二章「小説」の生成では、「朝倉」という小説が、安易な「物語」を突き放す仕組みを複数のレベルで備えていることを明らかにしている。その上で、発表誌である「文藝世紀」（およびその中心であった中河与一、さらにその代表作『天の夕顔』）との間に強い緊張関係を見出している。

第二部「戦後日本社会と「小説」」では、一九五〇年代から六〇年代にかけて発表された作品を、主に同時代の文壇や政治状況との関係に着目して考察している。

第三章「偽装された「古代」」では、代表作『潮騒』を、隠蔽されるヒロインの内面を中心に分析している。その分析を通じて、通俗的かつ平坦な物語と評価されがちであったこの作品に、戦後日本の「民主化」への批判を読み取っている。

第四章「幽霊」の劇では、作家自身の手によって廃曲とされた戯曲「源氏供養」を、同時期のベストセラー（原田康子『挽歌』）や、純文学論争（文学者の「アクチュアリティ」をめぐる議論）への批評がこめられた作品として読み直している。

第五章「混線」する「世界」では、婦人雑誌に発表された『愛の疾走』を、作中で反復される「世界」という言葉を手がかりに、多様な語りが「混線」している構造を明らかにした上で、「世界」の片隅を取りあげながら

広がりを描く点に、冷戦構造下に発表された小説としての批評意識を探っている。

第三部「文学」と「行動」のあいでは、最晩年に書かれたゆえに、作者の「行動」と緊密に関係づけて読まれてきた二つの（遺作）を、あくまで小説として精読している。

第六章「倫理としての「個」」では、楯の会での出来事を描いた「蘭陵王」を、語りと音楽の表象に着目して分析し、一見「集団」を肯定的に描いているように受け取られる作品が、実は「個」による芸術表現を際立たせる仕組みを持つことを明らかにしている。

第七章「生き永らえた「物語」」では、『豊饒の海』について、まず『ボヴァリー夫人』『肉体の悪魔』『危険な関係』などからの部分的な借用を指摘している。その上で、それらの借用が、四部作の最初と最後にあたる『春の雪』と『天人五衰』で印象的に描かれる綾倉聡子という人物の能動性を暗示していることを指摘し、「物語」だけが残されてゆく結末部分を考察している。

【論文審査の結果の要旨】

本論はまず、緻密な作品論の集積として高く評価される。申請者は、三島由紀夫の作品を同時代の言説や状況と密接に関わらせて読むことで、これまで見過ごされてきた解釈が可能になることを論証している。特に、代表作『潮騒』『豊饒の海』の解釈を更新するだけでなく、初期の習作として見過ごされがちな「祈りの日記」や「朝倉」、通俗的な内容として顧みられることの少なかった『愛の疾走』、多くの場合私小説的に読まれてきた「蘭陵王」といった作品について新たな読みの可能性を提示したことは、従来の研究に一石を投ずるものである。また、論証の過程で、三島の作品が、国内外の古典だけでなく、近現代に書かれた作品を少なからず摂取していることを明らかにしたことも見逃せない功績である。

一方で、課題も残されている。「作品の方法」と題した論文であるにもかかわらず、所々で人としての三島由紀夫が前景化してしまう部分があったことは否めない。また、いくつかの用語や言い回しに、曖昧さや誤解を招く表現が見られた。さらに、三島作品と同時代を考える上で、『宴のあと』『青の時代』など、より端的に時代と深く関わった形跡のある作品が考察されていれば、より説得力を持った論になったのではないかと惜しまれる。

とはいえ、以上のような問題点は含みつつも、先行研究を批判的に読み解き、新たな解釈を提示する着眼と構成力、同時代状況を的確に把握する分析能力は高く評価されるべきである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。